



たいしも通信

自衛隊の装備シリーズその4、1周まわって2度目の海自編、今回は少しマイナーな哨戒艦についてお話しします。

◆哨戒艦について

哨戒艦といってもあまり聞き慣れない艦種だと思えますが、某周辺国の海洋活動の急速な拡大・活発化が続く中、常統的な日本周辺海域の警戒監視を行うことを目的とし、最近導入が決定しました。発表された性能は、基準排水量1920トン、最大速度20kt以上、監視用に水上・水中無人機を搭載しますが、武装は30ミリ機関砲1門のみ。さらに乗員数約30名で、ほぼ同じ大きさのあぶくま型の120名、多機能省人化のものがみ型の90名と比べても少なく、同規模の巡視船並ということになり、これまでの護衛艦を見慣れた方からすると不安に思われるかもしれません。

実際には哨戒艦の定義は少し曖昧で、国により目的と形も様々です。ただし沿岸部や港湾警備などを主任務とした小型艦の場合が圧倒的に多く、日本のように小型艦でありながら、長期間にわたり遙か洋上の警戒監視を担うような例はあまりなく、そのような任務を想定している英国では約4000トン、ノルウェーに至っては6300トンの大型艦となっています。

また、この哨戒艦の建造費は約90億円で、イージス艦まや型の1680億円とは比べるべくもありませんが、さきほど触れたあぶくま型の約120億円と比べても相当な廉価で、その分數多く建造する予定です。

◆哨戒艦の意義

あまり屈強とは言えない艦種ですが、何もこの艦だけで大型艦艇と決死の対決をするわけではなく、多くの地点で常統的な

監視を行い、それらをネットワークで結ぶことに意味があるので。現在、重要な海域には、なけなしのイージス艦を配置していますが、とても数が足りず、状況によっては掃海艇や支援艦なども配置しているのが実情です。当然ながらイージス艦も含め、それらが本来担っている任務が、その間はできないということになります。また、1つの艦が監視できる範囲はイージス艦だろうと哨戒艦のようないくつかの艦とあまり差はなく、むしろ多数配備して空白地帯を解消し、必要な場所に必要な兵力を集中させることに意味があるのです。

◆海自の敵は・・・

とはいえ、いかに省人化・自動化が進んでも、現状ではすべてのビークルを無人化することはできず、必要な隊員数の確保は作戦遂行の最低条件です。それゆえ、海自最大の脅威は外的にもまして日本の少子高齢化であるとも言われています。海自の任務は艦艇部隊はもちろん、航空部隊でも長時間・長期間職場に拘束される場合が多く、それが3幕の中でも特に募集が厳しい理由でもあります。しかし逆に言えば、限られたチームで、上級司令部も含めたわずらわしい(?)人混みから離れ、自分達だけで淡々と任務を遂行する、という海自ならではの醍醐味もあります。

▼▼編集後記▲▲

空母などを含む強力な戦闘打撃群はしかし、出港した瞬間から衛星などにより世界中に知れ渡ります。しかし武装漁船などは迎撃が簡単でも探知が難しく、実際には大きな脅威となります。軍隊と沿岸警備隊、さらには漁船までもがシームレスに連携する某周辺国に対処するには、発想の転換も必要ですね。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあります。特に規則等に定めているもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。